

報告番号 甲 第 号

川崎美穂君 博士学位請求論文 審査報告

論文題目 中世地方武家文芸の研究—連歌と和漢聯句—

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学教授（文学部）文学研究科委員 小川 剛生

副査 慶應義塾大学教授（附属研究所斯道文庫） 堀川 貴司

副査 筑波大学教授（図書館情報メディア系） 綿拔 豊昭

本学位請求論文は、中世末期から近世初期、すなわち戦国時代の、大名や国人領主といった武家支配層の文芸の様相を、連歌と和漢聯句（「漢和聯句」も含む）を対象として考察したものである。連歌と和漢聯句は戦国時代に最も愛された文芸であり、京都のみならず地方でも間断なく開催された。ところが、地方での催しは基礎的調査さえ十分ではなく、とくに和漢聯句は資料が未整理のまま放置されている。本論文は戦国大名の文芸愛好を追跡しつつ、文芸を通じた家中の支配や中央との交渉、そこで培われた文化的ネットワークをも明らかにしようとするものである。

本論文は以下のように構成されている。

凡例

序章

第一章 上杉氏の文芸

第一節 直江兼続の和漢聯句

第二節 連歌師里村紹巴と上杉氏家宰直江兼続

第三節 戦国末期の詩歌会

第四節 「鶉衣」の和と漢

第二章 成田氏の文芸

第一節 連歌師了意と忍城主成田氏長

第二節 校本「了意千句」

第三章 作品研究—直江兼続の連歌・和漢聯句

概説・凡例

第一節 天正十四年二月二日漢和聯句「堯舜二難并」注釈

第二節 永青文庫蔵天正十六年閏五月八日漢和聯句「新竹愛風静」注釈

第三節 直江兼統一座漢倭聯句「楓散風紅色」注釈

第四節 市立米沢図書館蔵慶長三年三月二日賦何人連歌「しめゆふや」注釈
—新出の直江兼統・称念寺其阿両吟連歌—

第五節 埼玉県立文書館蔵慶長五年正月廿一日賦何船連歌「梅か香は」注釈
—上杉景勝主催の連歌—

第六節 慶長六年十月四日漢倭聯句「落葉雨天下」注釈
—直江兼統主催の漢倭聯句—

第七節 慶應義塾図書館蔵慶長六年十二月十九日和漢聯句「堂のすみより」
注釈—新出の直江兼統主催の和漢聯句—

終章

論文要旨

川崎君は、卒業論文から一貫して、戦国大名が愛好した連歌・和漢聯句の研究に取り組み、成果を精力的に学術雑誌に発表して来た。この学位請求論文は、それらの既発表の論文8本に、新稿を加えて、3章13節から構成されている。

第一章は「上杉氏の文芸」と題して4節からなり、戦国大名上杉氏を対象とするが、ここでは景勝の時代、領国の政治・外交を指導した重臣直江兼統の活動が中心となっている。

第一節「直江兼統の和漢聯句」では、まず兼統が主催した、天正年間中期から慶長年間初期（1586-1602）にわたる文芸活動を一覧する。その間に10数度に近い和漢聯句の催しがあったことは知られていたが、新たに6度の会の本文が伝来していることを指摘する。これを加え、連衆（参加者）の構成を考察し、兼統の一門・被官のほか、上杉氏に従う越後・出羽・上野の国人が参加し、この会が家中を束ねる役割を果たしたことを明らかにする。さらに3期にわけて兼統の漢句を分析し、典拠・付合・句風の特徴を、京都の堂上廷臣による和漢聯句会と比較しつつ論ずる。

第二節「連歌師里村紹巴と上杉氏家宰直江兼統」では、兼統と紹巴との交渉が、天正15年に始まり、紹巴がその後の兼統の京都での活動に一定の役割を果たしたことを明らかにする。その証拠として紹介されたのが紹巴自ら書写し贈った和漢聯句の式目であり、その末には紹巴が自身の最新の発句十句を抜書している。この発句抜書には詞書も附されており、兼統の知己や上杉氏関係者が催した会での作を意図的に集めたことが分かる。なお、これらの発句は、句集『紹巴発句帳』『大発句帳』にも見出

されるものの、本文は抜書の方が優れている。また詞書には他書には知られない情報があり、紹巴の伝記資料としても有益である。

第三節「戦国末期の詩歌会」は、慶長7年2月、米沢に転封して間もない時期、兼続が主催した「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」を取り上げる。この催しは、上杉氏家臣および関係する領主・禅僧・連歌師、総勢27人が分担して、和歌67首・漢詩33篇を詠み、100枚の短冊を米沢に近い出羽亀岡の文殊堂に奉納した法楽詩歌会である。この方式は、中世の当座歌会で最もスタンダードな「続歌」であるが、戦国時代には詩歌会にも拡大した。すなわち、和歌と漢詩と共通の題を設定し、漢詩も和歌の料紙である短冊に記し、両者の垣根を低くする工夫が積極的に試みられた。今川義元や朝倉義景のもとでも同様な会が見られる。詩と歌とそれぞれの作者があい混じるのは和漢聯句も同じであるが、続歌ではその場に出席できない作者も参加可能であり、事実ここには京都妙心寺の長老も兼続のため参加し、かつ序を寄せており、転封後も保たれた影響力と、現地での家中の結束を示すものともなっている。

第四節「「鶉衣」の和と漢」では、兼続が和漢聯句において好んで用いた「鶉衣」「百結」という表現に着目する。「鶉衣」とは古襤褸の比喻で、『晋書』『荀子』に起源を持つが、「百結」は細長いものが曲がりくねるさまで、無関係である。本邦での和歌では「鶉の衣」は比較的ありふれた歌語ではあるが、伊勢物語の影響力が圧倒的に強く、襤褸の意はない。ところが、北宋の蘇軾の詩で、破衣を綴り合わせる意味で「百結」の語が詠まれ、かつ室町中期の連歌では襤褸を「鶉衣」とする表現が好まれ、これが継ぎ接ぎだらけであるとの連想から、五山僧の詩で初めて「鶉衣」と「百結」とが結びつけられた。兼続の表現は以上のような表現の沿革工夫を受け止めたことを示しており、俗人の詩でも五山僧の用法に注目すべきことを述べる。

第二章は「成田氏の文芸」である。成田氏の祖先は鎌倉幕府御家人で、戦国期には武蔵国忍（現埼玉県行田市）の地を本拠とし勢力を拡大、小田原北条氏と越後上杉氏との間で、半ば独立を保った国人領主である。成田氏の歴代もまた文芸を愛好したが、詠草の合点や歌書の贈与などを通じ、しばしば中央と交渉を持った。そこには紹巴らの連歌師が介在しており、この点で直江兼続と共通する。しかも、小田原合戦後に改易された成田氏長は兼続に庇護されており、両者は直接の交流があった。

成田氏の文学事績のうち最も有名なものが、氏長が召し抱えていた連歌師了意が天正16年6月2日から5日間で独吟した千句、いわゆる「了意千句」である。これには紹巴の点と評語も付されている。第一節「連歌師了意と忍城主成田氏長」は、この了意千句の成立と伝来、句風、評語を論じた、初めての総合的な研究である。まず、

成立事情として、了意がこの千句を鎌倉鶴岡八幡宮か荏柄天神に奉納したこと、これは小田原北条氏と豊臣政権との緊張が高まる中で、成田氏領国の安泰を祈る目的であったと推定する。著名連歌師の独吟千句の事例から見ても、説得力に富む。また通説では点は紹巴、評語は成立の9年後に紹巴の門弟紹与が附したとされるが、その誤りを正し、天正17年に紹巴自らが点と評語を付けたことを明らかにした。

了意千句はかなり広く流布し、伝存の写本の数も多い。第二節「校本「了意千句」」は、新出の伝本を加えた9本の本文を比較、諸本の間係を明らかにしている。諸本は大きく二系統に分かれ、第一系統の書陵部本（高野辰之旧蔵本）が改変少なく最も原態に近い。一方、第二系統は第一系統が流布して派生した本文であり、中でも天理図書館本や石川県小松天満宮本は比較的早く寛永年間頃に書写されたと見られ、独自の異文が多い。了意千句では合点も評語も諸本により増減が大きい。最も欠脱の少ないのは書陵部蔵本であるが、しかし完全ではなく、校異欄でこれらの異本の本文を一覧することで、本来の姿に遡ることができるようになった。

第三章「作品研究—直江兼続の連歌・和漢聯句」では、直江兼続が主催した連歌・和漢聯句のうちから、開催場所も時期も異なる7作品を年代順に選んで、本文批判と注釈を行って、もって上杉氏文芸の特色を解明しようとしたものである。

第一節「天正十四年二月二日漢和聯句「堯舜二難并」注釈」は、兼続の参加が初めて確認される会を対象とする。『歴代古案』に翻刻が備わるが、誤りが間々見られるため、『上杉年譜』所収本で本文を校訂している。その他の作者は宇津江朝清、木戸元斎、大国実頼ら兼続の側近・親族である。「公木」と号する漢句作者は相国寺の清叔寿泉と推定する。おそらくその下向を受けての、学問に励む初学期の内々の催しであろう。ここで兼続は「鈎斎」、朝清は「江斎」という斎号を用いている。

第二節「永青文庫蔵天正十六年閏五月八日漢和聯句「新竹愛風静」注釈」は、上杉氏が豊臣政権の麾下に参じ、兼続が頻繁に上洛していた時期、細川幽斎邸に招かれての会である。ここでの兼続は、幽斎のほか、西笑承兌、有節瑞保、紹巴ら名高い詩人・連歌師に伍して句を出しており、上杉氏の外交の一端を窺える。

第三節「直江兼続一座漢倭聯句「楓散風紅色」注釈」は、兼続が主催した一座である。底本は上杉家文書、米沢市上杉博物館蔵『直江城州漢倭』である。興行時期を文禄2年冬と推定し、連衆の顔ぶれを検討している。京都での催しであるが、兼続が庇護していた成田氏長や木戸元斎、紹巴の門弟連歌師などが存在感を見せ、兼続一門の催しという性格がより濃いものである。

第四節「市立米沢図書館蔵慶長三年三月二日賦何人連歌「しめゆふや」注釈—新出

の直江兼続・称念寺其阿阿吟連歌」は、新出の会津での作品である。これまで兼続の文学活動はもっぱら漢詩漢文であったが、ここで珍しく連歌を詠んでおり、その歌才を知ることができる。

第五節「埼玉県立文書館蔵慶長五年正月廿一日賦何船連歌「梅か香は」注釈—上杉景勝主催の連歌—」は、上杉景勝と家臣が興行した連歌である。『鷲宮町史』が触れたのみで、長らくその所在は不明であったが、埼玉県立文書館蔵長野家文書のうちに再発見、紹介し注釈した。慶長5年は上杉氏にとり運命の年であり、そのような年の文学活動はそれだけで貴重である。

第六節「慶長六年十月四日漢倭聯句「落葉雨天下」注釈—直江兼続主催の漢倭聯句—」も、米沢市の郷土史家今井清見氏が遺した筆写資料の稿本より、新たに見出された一座である。京都での催しと考えられる。

第七節「慶應義塾図書館蔵慶長六年十二月十九日和漢聯句「堂のすみより」注釈—新出の直江兼続主催の和漢聯句—」は、米沢の地での初めての興行で、兼続のほか上杉氏の家臣、所縁の禅僧ら総勢11人による。本百韻の存在は今井清見氏が『直江城州公小伝』で触れているが、所蔵者の情報はなく、内容は長らく不明であった。懐紙原本が現存することが判明、その全貌を明らかにした。

審査要旨

戦国大名上杉氏は、景勝（謙信の養子）の時代に、越後国内の統一を果たすが、いっぽう中央の動向とも無関係ではいられず、やがて豊臣政権に服属し、会津へ移った。関ヶ原合戦後は、徳川氏によってさらに米沢へ減封させられたが、近世大名として存続する。激動期を乗り越えた上杉氏の政治方針は、景勝が信任する家宰、すなわち筆頭家老というべき直江兼続が決定していたとされる。川崎君は、この兼続が文芸活動においても主導力を発揮していたと見て、さまざまな面から考察した。

文芸の営みは権力を荘厳することがある。とりわけ地域国家とも言える戦国大名のもとで、被官（直属家臣）や国人（領国内の半独立の領主）、下向した連歌師・禅僧らを一堂に集める歌会や連歌は、家中の融和を期し、中央や隣国との交渉の場となるなど、支配や外交と無関係ではなかったとされる。そのため、近年は史学でも文芸資料に関心を払うようになってきている。川崎君の研究もこれに沿っているが、先行研究がほとんど関心を払わなかった和漢聯句を中心に考察したこと、中央と地方とを結ぶ連歌師の働きを具体的に明らかにしたこと、文芸の資料が比較的乏しいとされて来た北国・東国の大名・国人を対象としたことが特色であり、大きな成果を上げている。

戦国大名文芸の研究は、前代からの伝統があり資料も豊富な和歌・連歌に集中し、また中央から指導者格で下向した歌人・連歌師の役割が注目されて来た。ところが、現地で文芸活動をした人々、その作品については、実はあまり分析されていない。かつこの時期は漢詩漢文も盛んになり、五山や林下（妙心寺・大徳寺）に属する禅僧の貢献も無視できない。しかし、禅僧は独立した社会を形成し、俗人とは教養の基盤が異なっており、五山文学は中世文学ではなお孤絶した扱いを受けている。

この時、和句と漢句とを、連歌の要領で、五十ないし百韻（句）付けて完成させる和漢聯句は、当時の知識人が一堂に会して楽しむことができる数少ない文芸であった。しかも、正統的な詩や文章を重んじた五山に対し、新興の林下、とくに妙心寺派が和漢聯句を得意としたこと、その妙心寺派禅僧が北国・東国に教線を展開、多くの大名に政治顧問として迎えられたことは和漢聯句の流行にとって重要である。

直江兼続が、和漢聯句を好んで開催し、俗人の武家でありながらもっぱら漢句を詠んでいたことから、兼続の教養、かつその政治的な志向をもある程度説明することができるのである。従来、その具体的な材料としては、直江版と呼ばれる漢籍出版事業のほかには、10篇程度の漢詩があるだけであったが、本論文では、遺された和漢聯句作品を読み解くことで、兼続の学才をよく明らかにしている。

第一章第一節で考察した、大名とその被官・国人・連歌師・禅僧など様々な人々が一堂に会した上杉氏の和漢聯句の記録は、そのまま同氏家中の構成や、交流の様相を知る資料となる。継続する文芸活動でも兼続の指導力は圧倒的であった。第二節で見る通り、家中の統率のみならず、豊臣政権との交渉も担い、連歌や和漢聯句を通じ、秀吉の信任を受ける幽斎や西笑との交流を重ねている。第三節で取り上げた、「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」は、米沢転封後の家中の動揺を抑えるために、階層を越え結束する催しであったことが明らかにされる。第四節「「鶉衣」の和と漢」だけは、やや孤立した内容であるが、稀少な和漢聯句の表現研究である。兼続たちが多用する表現は、必ずしも源泉と目される漢籍を直接に承けたものではなく、五山僧の詩作で十分に熟してから、さらに文字数を圧縮して生じたことを指摘している。

そして、川崎君はこうした地方武家の文芸活動を支えた存在として、連歌師の里村紹巴や了意に着目する。紹巴といえ、戦国大名と連歌との関わりを知る上では必ず言及され、他を凌ぐ膨大な作品数と全国にわたる交遊圏が注目されて来た。だが、その活動の実態は必ずしも個別のケースでは明らかになっていない。川崎君はこの現状を踏まえ、上杉氏や成田氏の文芸活動における紹巴の役割を捉え直し、紹巴の地方武家との接触、交流、あるいは指導内容を明らかにした。第二章では了意千句の初めて

の本格的研究によって、成田氏の築いた連歌壇の方向性を明らかにした。この千句は了意個人の試みではない。宗祇の三島千句、兼載の難波田千句、宗長の出陣千句など、いずれも著名連歌師が大名・国人の意を受け、その祈願を成就するため短期間で独吟したものとし、了意千句をこの系譜に位置付ける。一方、こうした独吟千句は後人から稽古の参考とされるもので、了意千句も点と評語とあわせ、むしろ紹巴の連歌指導を知るべき作品として享受されたことを指摘し、了意の句風と紹巴の評語とをあわせて検討した点はいへん貴重な成果である。了意はいまだ有名な人物ではないが、この千句の研究は、織豊期連歌史の見直しにも繋がるであろう。

このように見れば、連歌や和漢聯句は、中央から地方へと拡散する戦国時代の文学研究において主要な研究対象となるはずであるが、いっぽうで、基礎的な調査さえいまだ進んでいないことも明らかになる。その理由は、郷土資料のうちに懐紙やその写しなどがあっても関心を持たれず、どこにどのような作品が伝わるのかさえ判然としていなかったからである。川崎君は地域の寺院や神社、図書館・博物館などに所蔵される、郷土資料の調査を続けた。その範囲は、たとえば上杉氏でいえば、上杉家文書をまとめて伝える米沢市とその近隣はもちろんのこと、郷土史家の遺した調査記録にも及んだ。

この結果、直江兼統でさえ、未知の作品がいくつも見出されることになった。川崎君はその内容を紹介するだけでなく、作品の当時の「読み」を明らかにし、地域の歴史や文芸の潮流のうちに位置付けた。第三章はそうした調査と研究を集成したもので、上杉氏の和漢聯句・連歌の安定した本文を提供し、それに精密な注釈を施している。この注釈は、一句の解釈、前後の付合と展開の解釈を示すことは無論のこと、連衆の伝記を考証し、さらに伝来や享受の過程をも推定したことで、文学史的な位置付けが可能となっている。このような文芸作品と、文書・記録などの歴史資料とを比較対照して立論することで、それまではたぶんに推測に頼っていた、地方武家の思考や感性をも、より正確に描き出すことに成功している。総合的に評価すれば、本論文の意義は、この時代の武家文芸の実態と性質を、初めて具体的に明らかにした点にある。

しかし一方で、この論文には、いくつかの問題点や課題がないわけではない。

まず、全体にわたり、新出資料の紹介にかなりの紙数が費やされ、基礎的考察に関しては丹念に分析されるいっぽうで、論点が細分化してしまっている。

そのために、和漢聯句の文学的な研究としては部分的な考察にとどまっている。第一章第四節、あるいは第三章の概説のような論述を集積した上で、和漢聯句ならでのレトリックの特徴の指摘、その分析、文学史的な評価が必要となってくる。

関連して、和漢聯句は座の文芸であり、個人の学才がどれほど発揮されるかも、やや慎重に評価すべきであった。それが盛んとなった背景には、古典講釈の場との連続性も考慮すべきである。当時の内裏や公家では禅僧が三体詩や蒙求などを講義し、和漢聯句を巻くことがよくある。学習した故事・説話を使ったものらしい。兼続の場合もそうした事情が想定できる。さらに和漢聯句は、禅僧の間で流行した（漢句だけの）聯句との関係も無視できない。兼続周辺の五山僧の聯句作品は歴大に残存するので、これらとの比較が欲しかった。

この時、作者が実際に眼にした書物への視点が欠かせない。元代・明代刊行の韻書・類書は、本邦中世の学芸に強い影響を与えたが、禅僧はこれらを抄出し、コンパクトな語彙集（略韻）を作成し愛用していた。兼続にも自筆の「直江韻書」が伝来している。その考察が本論文に組み込まれなかったのは残念である。兼続のみならず、当時の地方武家の文学的素養を知る貴重な手がかりとなったはずである。

そもそも、いかに和漢聯句が流行したとはいえ、戦国期の武家で、これほど長期間にわたり、一定の水準を保って行われた例は全国でも珍しい。ここで論じたことがどこまで普遍化できるかという疑問も生ずる。それは他の地方武家の和漢聯句を分析、比較することで、ある程度答えが見えて来るはずである。さらに、兼続は「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」からなお 20 年近く生きているが、その間の文芸活動が伝えられないのはどうしてか。

また、注釈においてもいくつか考慮の余地がある。たとえば先行例が確認されない表現を「俳諧的である」と指摘するが、より周到な調査が必要である。ちょうど連歌から俳諧へと移行する時期でもあり、「俳諧的」な表現は近世俳諧の萌芽として評価できる可能性もある。中世に軸足を置きつつも近世俳諧から武家連歌を捉える視点が必要となる。実際、兼続の関係者には江戸俳諧で活躍する人材もいる。文学史・文化史において天正・慶長という端境期の意義は、多くの人が認めている。まさにその時期に活動した兼続とその周辺を、俯瞰的にとらえるべきであったと思われる。

ただし、以上の課題は、この論文が提示したものの大きさを逆に示すものであり、ここで得られた成果は貴重で揺るぎない。このように戦国大名の文芸を周到に分析した研究は、現在のところ、他に見られない。今後、この研究の方法と成果が、各地方史の記述に与える影響も大きいと予想される。そこで審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位授与に十分ふさわしいと判断するものである。